



椿



ihura

その名を与えられし花は、散ることなく、ほとりと落つる。

——落ちても尚美しいとはまさにこのことよのう
と誰かが言った。

——それならば、庭を埋め尽くすほどに椿を植えておきましょう
と誰かが答えた。
お待ちしましょう、と。こことあなたに分かるように、と。

けれども、その花の名を与えられしものは、こどもは——どうすれば良いのか。

* * *

霞がけぶる中、常緑に埋もれる鮮やかな紅に目を細む。

椿、と呼びかければ、彼の少女は口を引き結んで、ついと目線をこちらに向け、けれども、すぐに咲き乱れる紅い椿の花へと何ともきまり悪そうに目を逸らした。

意味もなく紛らわそうと己の指先で黄の芯をつつく少女を眺めて、朔（ついたち）は相好を崩してうち笑う。

「ね、お茶の一つも出ないものかな？」

「……いい、けど」

艶やかな花卉に触れた手は、そろりと震えて、零れそうな紅は落ちることなく枝にしがみつく。朔は、椿から離れた手を落ちる前に己の手に取った。彼女の手は、小さくて、白くて、だが、細かく切れた皮膚には紅が滲む。冷たい冬の水にさらされた手は、綺麗でも至るところに傷がある。

ね、と朔は首を傾げて、己よりも背の低い女子（おなご）の顔を覗き込んだ。至極透明な黒茶の瞳が、それでも光を宿す黒茶の瞳が、かち合うと同時に微かに揺れる瞬間が朔は例えようもなく好きだった。

「ね、椿。祝言を挙げない？」

一對の黒茶がわずかに開かれ、そのまま、くしゃりと歪んで崩れる。

「いいけど、とは言わないの？」

朔が問えば、椿はふるりと一度首を振って、「何度も言った」と掠れた声を響かせた。

彼らの間を吹いた風は、黒い髪を掬っては流れる。目の前を行きすぎる黒糸をそのままに、風

が治まるのを待って、朔は再び口を開いた。

「だから、何度も言ってるんでしょう？ 出会った時から、ずっと。椿が何度も断るから」

かつて胡乱気に向けられていた瞳は、今や痛まし気に代わり、どちらの方が良かったのか朔には分からなかった。それでも、時折向けられる穏やかに凧いだ瞳の色があるから、今の方が前にも増してより愛おしいと思える。率直に嬉しいと思う。

ね、と声を掛ければ、まるでその先を遮るように彼女はぼつりと呟く。

「朔は武家でしょう」

「椿も武家の娘でしょう？」

「……落ちぶれてる」

「別に構わないよ。もう戦なんて疾うの昔に果てた。今じゃ武家も名ばかり」

そうでしょう？ と問い返せば、少女からは「そうじゃなくて」と返る。

「何度も言ってるでしょう。椿は、……忌まれてる」

散ることなく、花の姿のまま、ほとりと首を落とす椿は縁起が悪いと。

落つ首も、太平となった今では最早ないというのに——出回った風習はなかなか削がれはしない。

椿というその名だけで、ないがしろにされてきたその女子は、ひたと目の前に立つ青年を見据えた。

「だから、嫌。朔の首が落ちるのは嫌」

落ちるわけがないでしょ、と苦笑して、朔が彼女の額を、ていと押し叩けば、「落ちたらどうするのよ」と不機嫌な声が戻る。

「父上の首は」

「うん、分かってる。何度も聞いたから」

椿を愛でた彼女の父は鬪争の最中に首を落とされた。彼女の母は、約束の印として椿を植えていた。産まれた女子にも夫の愛する花の名を授けて待った。

落とされた首はほんに美しゅうて、まるで地に落つた椿の花のようじゃったと、目を細めては涙していた、と。椿はそんな母の姿を何度も何度も見てきたのだ、と。朔は聞き知っていた。

「だけど、だからこそ、椿の名は愛されてつけられた名でしょう？ それを、忘れちゃいけないよ。椿は自分の名が嫌い？」

「嫌いじゃ、ないけど……」

嫌い、と呟き、目を伏せた少女の顔には翳が落ちる。瞬かれると同時に陽光をも弾く睫毛は、そよ風を送るようにそ、と揺れる。

朔は刻一刻と留まることなく些細な変化を起こす彼女の表情を眺めやって、ふと目を細めた。逸らされた一対を探るように、椿の顎に添えた手をくいと上げる。

ね、と朔はまるで逸らすのを惜しむかのように、少女の黒茶を見据えた。

「僕は、はらはらと舞う山茶花よりも、ほとりと落つる椿の方が好きだよ？」

ね、と朔は楽しそうに、面白そうに、朗らかに、続ける。

「知ってる？ 椿はとても人に好まれているよ。」

椿の油は髪を艶やかにするのに使われるでしょう？ それに、刀を錆びにくくもしてくれる。葉は打撲にもよく効くし、葉が灰になれば媒染剤にも、焼き物の釉薬（うわぐすり）にもなる。椿の材木は重宝されているし、炭は火の粉も飛ばさぬ高級品だよ。それにね、椿の木には神が宿るとされている。邪気や災いを祓ってくれると、忌避されるよりも、もっと古からずっとずっと言い伝えられているんだ。

忌まれるよりも、椿はずっと人に好かれてきたんだよ。ずっと好かれているんだよ」

*

椿は何も答えない。唇の端をほんの少し噛んで、逸らしたくても逸らすことは叶わないから、椿はただ朔をじい、と見上げるしかなかった。

つまりね、何が言いたいかと言うとね、と朔は相も変わらず、ほんのりと笑う。

「僕は椿がとても愛おしいということ」

そこに彼女の意思は存在しなくて、いつも青年の笑みによって隅へと追いやられて。む、と眉を寄せて抵抗してみても、打ち消されて泡のように溶けて弾けるから、椿は余計に悲しかった。きっと朔はこんなこと気付いてもいないのだろうけど。やはり、気付いて欲しくはないのだけれど。

朔は、と椿は青年をじいと見上げたまま心細げに口を動かした。

「どうして、そんなことばかり言うの？」

ほっといてくれればいいのに、と彼が姿を現す度に、椿は思ってしまう。そうしたら、どんなに楽だろうかと考えていたのは始めからで、けれども、どこか違ってきてしまったのはいつからだったろうか。

きゅっと握りしめた袖は皺が寄って、離さなければと分かっているのに、握りしめてしまう。掴まっていないと、落ちてしまいそうで、どうしても怖かったから――きゅっと、手に力ばかりが籠る。

だから、いつも言っているのに、と朔はくつりと笑った。

私もいつも言っているでしょう、と椿は笑われたことに納得がいなくて、青年を睨めつけた。

それでも朔は、「ね」と椿に問いかける。

「これを受け取って欲しいんだけどな」

そう言った朔の手の中には、けれど、何も握られてはいない。「何」と椿が問えば、「後向いて」と言われる。不審げに見ていると、結局朔は自ら椿の後ろ手へと回った。

わっ、と椿が声を上げてしまったのは、急に髪を引っ張られたから。優しく、優しく、されているのは分かるのだが、それでも違和感は否めない。「あれ」とか「ううむ」と己の背後で考え込んでいる朔の唸りを聞きながら、一体何なんだと椿は空を見上げた。春の木と書く花が咲いたというのに、浮かぶ空は寒そうにくすんでいる。ちらり、ちらりと雪の粉が舞い始めてもまだ不思議ではない。

椿は自分と同じ名を持つ花にそうと触れた。紅の花を覆う艶やかな常緑の葉は、鮮明に輝き過ぎて眩暈がする。

ついに遠ざかった髪を撫ぜる手に、椿はそろりと瞼を上げた。

扱じられていた黒髪は縛（いまし）めを失くして、するりと解けて何事も無かったように流れ落ちる。辺りにはかつんと澄んだ音だけが高く響いた。

椿が振り向いてみれば、朔はしかめ面で地面と睨み合いをしていた。彼の目線の行く先を辿って、椿も雑草すらない剥き出しの地を見やる。

冷え冷えとした薄茶の地面の上には、飴色の簪（かんざし）が一挿し。

それで、椿は「ああ」と悟り、しゃがみ込んだ。温もりの色合いを持つ透明の簪に手を伸ばす。土埃を払いやったら、なんだかとても可笑しくなって、椿は朔を見上げた。

「へたくそ」

「うーん、返す言葉もありません」

差し出された手に、椿は己のが手を添えて立つ。

「存外難しいものだね。もっと簡単かと思ってたよ。椿はあっという間に結いあげちゃうから」

握りしめた掌から覗く飴色の簪の表面を、椿はもう一方の手で撫でた。つやつやと触り心地がよく、しっとり肌と馴染む簪からは、見た目と同様、温もりまでもがじんわりと伝わってくる気がした。

きれい、と椿の口からは自然と感嘆が零れ落ちた。

深みのある繊細な色は差し込む光さえも柔らかな優しいものへと加減を変えてしまう。手の中で透き通る光に飽くことなど決してないように思われて、椿は簪をじいと眺め見つめた。

ね、と朔は楽しそうに椿へ話しかける。

「これね、鼈甲（べっこう）。斑（ふ）は入ってないけどね、鼈甲なんだよ。高いんだよ。ものすっごく、とっても、とっても高かったんだよ？」

椿は手元に注いでいた視線を瞬（しばた）かせ、慌てて朔に簪を押し返した。朔は簪をひょいと椿の手から取り上げ、頭上に掲げると、陽光に照らして飴色の簪を透かし見る。

「あー、傷がついちゃってるね。傷がついちゃったよ。せっかくの鼈甲に傷がついちゃったね。さっき落としちゃったからなあ」

ねえ椿、と朔は非難めいた面白みを投げて、彼女に同意を求めた。

「お、……としたのは、朔でしょう？」

椿も朔に負けじと非難を向けてみた。なぜなら否があるとすれば、それは明らかに彼の方で、責められるべきは彼なのだ。されど、せっかくの深みのある艶の中に線が引かれてしまったのは、ほんのわずかなものではあるが事実で、半ば尻つぼみとなってしまった非難には説得力が足りないようだった。

傷があっても椿には美しく見える。それでもやはり、ついてしまった傷が惜しいと感じているせいか俯いてしまう。

「どうしようかなあ、これ。傷がついちゃったしね、返品することもできないね」と朔は椿の目に映るように簪を差し出してきた。

「もしかして、脅してるの？」

「脅したら受け入れてくれるなら、いくらでも」

椿は胡散臭げに朔を見上げる。すると、朔は「ね」とほんのり微笑して、椿の手を取り、そのまま彼女の掌へと簪を落とした。つられて椿も己の手の中を見下ろす。掌には先程と寸分変わらぬ澄んだ飴色があった。

*

ね、と椿は簪からようやく目を離して、目の前に立つ青年を見据えた。共に椿の手の中を見ていた朔もまた、少女の呼びかけに簪から顔を上げる。

いいの、と椿は問う。

「本当に、いいの？」

存分に確認するように、少女はゆっくりとゆっくりと問うた。

うん、と朔は頷いた。何度も何度も繰り返してきたにも関わらず、未だ不安気に揺れつづけているものを、留めて止めるようにそおっと、椿の手の中に包み込ませる。

「ありがとう」と朔は添えた手を離さぬまま言った。

椿は朔を見つめたまま、どこか驚いたように目を瞞ったから、彼は目を細めて彼女の姿を留め置く。

ね、と朔は椿に呼びかけた。

椿は本当に椿のようだと彼は秘かにずっと思っていたから。

少女の笑みは、まるでその名と同じ花のように

———ほとりと静かに、零れて落つる。

はじまりのひとかけら

白き雪の中で花開き、春を告げる常緑の木。

災厄を祓うと古より大切にされ続けた花樹は、その散り方ゆえに忌み嫌われるようになった。ほとりと首を落とす血色の花は誰からも不気味と厭われる。

これは、そんな時代、とある国に在った少女の話。

幾つもある出会いの始まりのひとかけら。

紅の鮮やかなる花を与えられし、少女一一一名を椿。

* * *

「何者じゃっ！」

少女は頬を紅潮させて、手にしていた竹箒を突き出してきた。

荒げられた声が真白な雪に吸い込まれる。

雪中に浮かび上がる常緑よりも、その木が守る紅の花よりも、小袖を身に纏った少女の方が鮮やかに映えて見えた。

*

朔（ついたち）は偶然出会った少女を思い出して、くつりと笑う。家人が怪訝気に眉を寄せたが、そんなのを気にするような彼ではなかった。

*

都からの帰り道、常時使っていた通りが雪に埋もれていた為に朔は回り道をするを余儀なくされた。馬上にいる朔が雪に足を取られる心配はないが、これだけ雪が深ければ馬だって足を取られかねない。仕方がないので朔は幾許か道に戻り、雪の少ない横道を入り行ったのだ。

どれくらい進んだ頃だったろうか。

視界いっぱい広がる椿の垣根に、朔は目をすがめた。艶やかに光る緑の葉には、黄の花芯を持つ紅の花がぼつりぼつりと咲き宿っている。「へえ」と朔は知らず、感嘆を漏らしていた。

首を落とすとして忌み嫌われている花。特に武家の育ちである朔は山で自生している椿くらいしか目にすることがない。山にある椿でだってここまで多くの椿を一度に見たことはなかった。

それが、こんなにたくさん、数え切れぬ程までに咲き乱れている。

「血色ねえ……」

それにしても鮮やか過ぎるけど、と朔は馬から降りることなく、そと花に触れる。拳と同じ程の大ぶりの花は、白き雪に落としたらさぞ綺麗だろうな、と彼は思った。ほとりと首ごと落ちると言うが、地面に落ちているものは一つもない。

ふむ、と朔は少しばかり紅の花と白い雪を見比べる。だが、思案していたのもほんのわずかな時間だけであった。彼はためらいもなく、ふつと椿の花を手折って、そのまま手の上から零す。

音も立てずに静かに雪に降りたつ椿を見やっ、朔は首を傾げた。予想していたよりも大した感慨はなかったのだ。

それならば、もう特に用はない。

紅を宿した常緑の垣根から、勢いよく少女が飛び出して来たのは、朔がその場を離れようとした正にその時だったのだ。

「何者じゃっ！」とその少女は突き出した竹箒を片手に、朔に問うた。

武士に対しては何とも無礼な振る舞い。

そこまでしてしまったら刀で斬り伏せられても文句も言えぬというのに、彼女は臆せず朔の前に立ち塞がった。尊大な少女の態度は、朔が思わず、帯刀し忘れたっけ、と己の刀を確認してしまった程である。

呆気にとられている朔へと少女は「人様の家の椿に何をしてる」とさらに声を荒げた。

「えっと、ああ……そうだね、申し訳ない」

朔が少女の氣勢に圧されて、謝ってしまえば、彼女はきゅっと唇を引き結ぶ。こちらを警戒しつつも、みしりみしりと浅く積もった雪を踏みしめ、朔の方へと近寄って来た。彼女の後ろからは、へこみ、できた足跡が一つ、二つと続く。

白き息を吐く馬の鼻先を通り抜け、朔の隣に立ったかと思うと、彼女は前触れもなくしゃがみ込んだ。

小さく、あかぎれのある手が、そうと紅の花を包み、拾い上げる。そのまま、少女はそろりと立ち上がり、ほう、と安堵の溜息を洩らした。目を伏せて、慈しむように椿の花を眺め見る。

いくつも、いくつも、埋もれ咲いている花の中のたった一つだというのに、彼女は至極大切そうに、椿を包み込んだ。

「……椿、好きなの？ そんなに？」

少女が手にしている花がとても特別なものであったかのような錯覚さえ覚えて、朔は尋ねた。

彼女は訝しげに彼を睨み上げてから、「好きじゃない」と端的に告げる。「なら、どうして」と朔が首を傾げれば、少女の瞳の黒茶がほんのわずか暗闇のように落ちた。

その時、生垣の向こうから「椿様」と声があがった。女の呼びかけに反応したのだろう。次の瞬間、少女の双眸にはもう焦りしか映ってはいなかった。

垣根の方へと振り返り、彼女は緑の茂みの向こうに叫びかけた。

「おばばっ！ こっち来ちゃだめ。危ないから」

忠告してから、自身も走り去ろうとする少女に向かって、朔は「ね」と呼びかけた。

「椿？」

朔が問えば、彼女はひたと立ち止まる。

「この花と同じ名前？」

らんと鋭く睨んでくる少女から、朔はそれが真であると悟った。

ねえ椿、と朔は初めて彼女の名を口にする。

「僕と一緒にならない？」

極限までに見開かれたかに思われた黒茶の双眸は、しかし、一瞬の後には胡乱さが勝ったらしい。奇妙なものでも見るように朔を見、ふいと逸らされた。

椿が消え入ってしまった垣根の入口を、朔は眺めやってほんのりと表情を緩ませた。

*

しきりに婚姻を進めてくる母に、共になりたい女子（おなご）を見つけた、と報告してみれば、朔の母は喜色を露わにした。けれども、彼女の承諾なしに勝手に名を挙げて告げれば、今度は「やめなさい」と息子を引き止めにかかる。

「椿など、ろくな女子ではあるまい。朔。そんな、どこぞの者とも知れぬ娘にうつつを抜かすなど」

「正真正銘の武家の娘だよ。問題ないでしょ」

堇の咲く季節になってようやく聞き知ったことを、朔はこともなげにさらりと言った。

「ですが、朔。そんな不吉な名の娘を家へと入れたらどうなるか」

「不吉、……と言うよりは、むしろ、首を落としに来た輩をことごとく祓ってくれそうではあったけどねえ」

朔は己に向けられた少女の瞳を思い出して、可笑しそうに笑う。

そんな息子を見やって、彼の母は頭を抱えた。

*

少女との会話がきちんと成り立つようになったのは、淡い藤の花が咲く頃。

渋々ながらも茶が出されるようになったのは、凜と立つ杜若（かきつばた）の咲く頃。

それに、茶受けが付くようになったのが、ころりとした鬼灯（ほおずき）が実をつける頃。

新年を迎える頃には、朔の父母は共に息子の説得を諦めた。

二度目の椿が咲く頃になると、相手の娘を不憫に思い始めるまでになっていた。

結局、全てが静かに落ちて治まったのは、ちょうど三度目となる椿が咲いた後のことだった。

「椿、椿、ちょっとおいで」

朔は、ふと滲み出る笑みを押し隠してつい先日彼の妻になったばかりの少女を呼び招く。

垣根の向こう側にいる彼女は、きっと彼の姿を見つけることができなかったのだろう。葉の隙間より見える椿は、あちらへ、こちらへと首を巡らせ、怪訝そうな顔をしている。

「朔（ついたち）？ どこ？」

「椿、こっち、下の方」

足元近くの緑の中に、によっきりと生えた腕。椿はぎょっとして後ずさった。続いて、朔の首が垣根に生えたものだから、彼女は「ひっ」と喉を引きつらせ、持っていた竹箒にしがみつく。

「ね、椿」

朔が椿に呼びかけると、彼女はより一層竹箒にしがみついた。

「なななな何！？」

「そんなに恐がらなくても……」

彼が腕を伸ばし、辛うじて椿の着物の裾を掴むと、彼女はあろうことか「だって、怖い！」と抗議してくる。

「大体、どうして椿が掃除してるのさ」

「――やあつ、やあつ、離して！」

「ま、待って、椿。さすがに箒を振りまわすのはやめようか！ 引っ張るのやめるから！」

朔は、ぱっと彼女の裾から手を離す。

垣根から消えた腕と首に、椿はなおも竹箒を握りしめながらも、怒らせていた肩をほっと落とした。

荒れていた呼吸が次第に引いていく。朔は、それを見計らって、再度、椿に声をかけた。

「……落ち着いた？」

「……………た、多分」

「あんね、椿。ここ、道が繋がってるんだ」

先と同じように垣根から腕を出した朔は、椿に向かってひらひらと手を振って見せる。

「葉が重なっているから気付きにくいけれど、結構大きな穴が開いてるんだよ。子どもの頃、よくここから外に出て遊んでいたんだ」

「朔が？」

「そう。秘密の抜け道なんだ」

まあ、さすがに今は出入りできないけど、朔は苦笑を洩らす。

「椿くらいなら通れそうかな、と思って」

だから、ちょっとおいで、と彼は彼女に手を伸ばす。

椿は数瞬、逡巡したが、結局竹箒を地に置くと、朔の手を取った。葉を掻き分けた垣根には、なるほど、彼の言う通り、ぽっかりと大きめの穴が開いている。本当に通れるか否か、危うい

といった感じの大きさだ。

垣根の穴越しに、朔と目が合う。

手を引かれるがままに、椿は垣根をくぐった。

「――つ、朔っ！ 笑ってないで何とかして」

見事に垣根の穴にはまってしまった椿を見て、朔は腹をよじって笑い転げた。

一体どうしてこんなことになってしまったのか。この状況はあまりにも情けなさすぎる。もしも姑や舅に見られてしまったら、恥ずかしくて死んでしまう、と椿は地面に真赤な顔を押し当てた。

「心配せずとも、助けてあげるから」

「当たり前でしょう……！」

椿が弱々しく助けを求めれば、朔は「うん」と頷き応じる。ばきばきと手早く垣根の枝を折り、穴を広げた朔は、彼女の身体が傷つかぬようにと用心して垣根から引っ張りだした。

悪かったね、と朔は椿を抱きとめる。

彼女の細い髪はどうしても枝に引っ掛かってしまったのか、ちらほらともつれてしまっている。

朔が彼女の肩を引き寄せる腕に力を込めると、椿は惑うように彼の胸に額を寄せた。

「あーあ。秘密の抜け穴が、ただのボロ穴になっちゃったね」

葉が覆いかぶさり、隠れていたはずの穴は、今ではぽっかりと空間が開いおり、傍から見ても抜け穴の存在が丸わかりだ。

朔は、かつての抜け穴の残骸を眺めやっ、小さく嘆息した。

「――ご、ごめん」

「そうじゃなくて。気分転換にいいと思ったんだよね。椿とこの家から、ちょっとの間、離れること。疲れるでしょ、この家に一日中いると」

「そんなことない。お義父上も、お義母上も、とても優しい」

「だけれど、慣れないうちは、息の詰まることもあるでしょう？ 椿にとっては、まだ他人の家に近いだろうから」

「――そんなことは」

「そういうものだよ、始めのうちは。誰にとっても」

椿の先を制して、朔は言う。

「だから、こっそり抜け出して、椿の家のあの縁側に行くのも気晴らしになるかと思った。まあ、長くても日暮れまでだけ」

「……………」

「気になるでしょう？ 椿のお母上が、おばば様が。ここから、人をやったとは言え、椿は、その後の様子を知らないからね」

小刻みに肩を震わせた椿の耳に、朔は口を寄せる。

「無理しなくていいよ。心配なら心配だと言いなさい。無理に紛らわそうと掃除しなくていい。だって、仮にも僕の奥方がこの家で箸を持ってると、逆におかしいことになっちゃってるし。ね、いつだって連れ帰ってあげるから」

椿は、くぐもった声で呻くように頷いた。「よろしい」と、朔は酷く柔和な声で頷く。

「文句は僕が受け持とう。まあ、うちの親は、どうせ僕が無理に連れだしたのだとしか思わないだろうけどね」

なら仕度に戻ろうか、と朔は椿に呼びかけた。

「さすがにこの格好であっちに行ったら、逆に心配されそうだ」

だって泥だらけ、と言われて朔から慌てて身体を離れた椿は閉口した。もちろん己が泥だらけなのは分かっていたのだが、やはり朔の衣服まで泥に塗れてしまっている。

彼女は無言のまま対する朔の着物を、はたはたとはいてみたが、あまり落ちたようには思えない。

「椿。いいから、一度戻るよ」

はい、回れ右一、と椿は朔に身体をくるりと垣根の側へ向けられる。

「ちょうど前にもまして抜け出しやすい穴が開いてしまったことだし、塞がれる前に、早々に抜け出すとしよう。着替え終わったら、即刻ここに集合すること。以上。解散！」

笑って、朔は、椿より先に垣根の合間をくぐり抜けた。

屋敷の敷地に戻った朔に向かって、残された椿は「ありがとう」と呼びかける。けれど、聞こえなかったのか、ちっとも振り向きそうのない背に、椿もまた急いで抜け穴をくぐると、彼の後を追いかけたのだ。

湿めり気を帯びた風が、重たくたゆたう。

じわりと汗ばんだ肌に張り付いた襦袢が何とも言えず疎ましい。

縁側に坐していた椿は、訳もなく足を動かしたくなる衝動をこらえた。

さりとして、盆を置いてしまった今では、特にすべきことを見いだせない。自然手持無沙汰となってしまう手を、彼女は組んでは離し、握り方をかえながら無為な動作を繰り返した。

ふと、目の端に橙色が映り込み、椿はそろりとそちらを伺い見た。

つるりと綺麗に皮の剥けた枇杷。

今にも果汁が滴りそうな程、瑞々しい橙色の実を、長い指が皿から掴みとる。

節の目立つ彼の手は、お世辞にも美しいと言えるものではない。けれどもすんなりと腕へとつながる手の甲が一一甲に浮き立つ骨が、指が動くたびに、些細に仕草を変えるのを、椿は不思議な心地で見つめていた。

生ぬるい風が微かに通り抜ける。

日差しで茶に透けた前髪が、さらさらと揺れ動いた。

涼しそうだなあ、と椿は羨ましく思う。自分の周りは、こんなにも暑くじめじめとしているのに、どうして彼の回りだけあんなにも涼しげなのか。

暑さを感じさせない横顔。

遮る垣根のその先を見据えていた彼の鼻先が、つとこちらを振り向いて、椿はそそくさと目を伏せた。

「あんねえ、椿」

「……」

「せっかく途中でとってきたんだから、見てるだけじゃなくて食べたら？」

ほら、と朔（ついたち）は、皿に残っていたもうひとつの枇杷を椿に差し出した。

椿は目の前に出された枇杷を見、ついで朔を胡乱気に見上げる。

「いいよ、朔の分だから。私たちの、朔がとってきすぎて、まだいっぱいあるから。あとで食べる。いらない」

「こら。僕の枇杷が食べられないっていうの？」

朔は自分の分の枇杷を口の中にほおり込むと、くいと椿の顎を上げた。「それは聞き捨てなりませんね」ともう一つの枇杷を椿の口に押し込む。

んむ、と椿は眉根を寄せた。口の中に、甘くて、けれど、少し渋みのある味が広がる。

朔はさも面白そうな光を双眸にたんと含ませて少女を見、椿の顎と枇杷とから手を離れた。

椿は一口分の枇杷を飲み込んでしまうと、食べかけを自身の手で持ちなおし、彼を睨めつける。

。

「喉につまったらどうするの」

「助けてあげるから心配なさるな、椿殿」

「そういう問題じゃない！」

朔はからからと笑いだした。ゆったりと縁側に腰掛けて、笑うその様は何とも楽しそうだ。

仕方がないので、椿は残りの枇杷も食べてしまうことにする。

「うー、べたべたする」

枇杷を持っていた手もだが、朔に触られた顎のあたりの感覚がひどく気になった。汁気の甘い香気が立ち上がる。朔の指に枇杷の汁がついていたせいだろう。

「だから、いやだったのに」

手を見つめながら溜息をついた椿に対し、朔は首を傾げる。

「食べたかったんじゃないの？」

「そんなこと思ってない」

「え。何。一緒になってくれる気になってた？」

「どうしてそうなるの」

「そうならないかなあーと思ったから」

ねえ？ と朔はいつものように彼女に問うた。

椿には、涼しげな彼の表情の奥にある真意をどうしても見出すことはできなかったから――はあ、と小さく嘆息を零す。

「……朔は時々馬鹿なんじゃないかと思う」

「ちょっと、それ椿、どういう意味……」

「何でもない」

椿は、ふいと顔をそらして、立ち上がる。「お茶、つぎなおしてくる」とまだ空にもなっていない湯のみを盆に載せて、彼女は朔を一人残し、縁側から離れた。